

BOOK REVIEW

創造力なき日本—アートの現場で甦る「覚悟」と「継続」

村上 隆 著

角川書店 ISBN978-4-04-110330-2 2012年10月発行

評者：森山朋絵（東京都現代美術館）

2010年4月のある日、「カオス*ラウンジ 2010 in 高橋コレクション日比谷」展のレセプションに顔を出すと、大勢の招待客の中に、アーティスト村上隆の姿があった。その姿に、20年近く前の稀有な邂逅を思い出した一筆者は90年代前半「大阪3D協会」という現代美術の秘密結社に所属し、大阪での会合に頻繁に出席していた。あるとき「メタリアスクエア」という道頓堀近くの豪華なラブホテルを舞台に、一晚のイベントが開催された。メンバーは豪華で、中村政人や中ザワヒデキら今も活躍する現代美術作家たちが、東京から参加した筆者らを待ちうけていた。「無印良品のモデルで一す」と自己紹介した参加者が、のちにゲーム「動物番長」でも知られるクリエイター松本弦人だった。ラブホテルの屋上プールや全館を使ってパフォーマンスが敢行され、騒然とした会場で、筆者は初めて村上隆に出会ったのだった。

メタリアスクエアの会場で、村上やアーティストらと色々話し、他愛ないやりとりもしたと思うが、今はまったく思い出せない。夜通しアートイベントを楽しんだ筆者らは、夜が明けるとすぐに、開通間もないのぞみで東京へ戻った。ほどなく東京で再会したとき、すっかり忘れられたと思いきや、意外に村上は「写真美術館（当時）の森山さんでしょ」と覚えてくれていた。

それから時が流れ、いつしか村上は「世界のムラカミ」になり、作品1点が6800万円という超高値で取引され、その活動は国際的に注目された。メタリアスクエアの夜を共有した若い作家たちもその後、それぞれすぐれた活動の軌跡を描いている。

ふたたび2010年の夜、無数に生成されるカオス*ラウンジによる作品画像が展示された高橋コレクション会場で、筆者は村上に、メタリアスクエアの夜の思い出と、近況をごく短く語った。あれから20年近く、公立美術館におけるアート&テクノロジーに取り組んできたこと、国内外で日本のメディアアートが評価を得ながら、いまだ拠点となる文化施設が成立しないことなどをとりとめなく話すと、村上は「こんな短い時間の中で、プレゼン上手ですね」と言った。そして別れ際に「もっともっと政治力を身につ

けてください」とも言い、歩み去った。その後は、彼の作品や企画を見ることはあっても、リアルな邂逅はそれきりである。

なぜここに長々と記したかという、本書で村上が述べていること、それが筆者への彼の言葉に集約されているように感じられたからである。すなわち、“芸術家というアスリート”として“アート業界で生きていく”ためには、すぐれたプレゼン力とポリティカルな実力を以て“芸術家は世界の本場で勝負しなければ”（以上、村上隆「芸術起業論」幻冬舎刊、2006年より）というのが、本書にも通底する彼の一貫した姿勢なのである。前掲書の中で、

村上はこうも言う—“ぼくは日本のサブカルチャーをハイアートに組み込むことで、欧米の美術の世界における新しいゲームを提案してきました”“『ハイアートとロウアートの境界を理解した上で、ロウアートをハイアートでわざとあつかう楽しみ』を提示したからこそ新解釈として理解されるのです”。さらに本書中では、芸術には「大衆芸術」と「純粋芸術」があって現代美術は純粋芸術に属しており、漫画やアニメに代表される日本の「大衆芸術」は、いま生きている人たちへの訴求力を最大化することに目的が絞られると彼は述べている。一方で現代美術作家たちは、才能を買ってくれたハイヒエラルキーの人たち

の期待を裏切らないようにしていれば大衆には理解不能なことをしていても許され、未来も含めた時代を乗り越えていく可能性を持つ、というのが彼の言説である。ダウンゴ会長川上量生との巻末対談では、『ニコ生トークセッション』の延長線上で、彼ら二人より少しだけ年少のデジタルネイティブ世代も含む世代論に言及している。村上が以前は期待を寄せた「この世界のフレームにおさまりきれない」カオス*ラウンジの自由奔放な創作=生成に対して彼自身がやがて持った、“現代美術ではまず、やはりフレームを理解してもらうことから始める必要がある”という懐疑には根拠がある。“フレームを理解するところから始める価値のつくり方”，それはVRを通して拡張する「世界のメタ認知」の出発点であり、表現意図=コンテンツの本質なのである。

